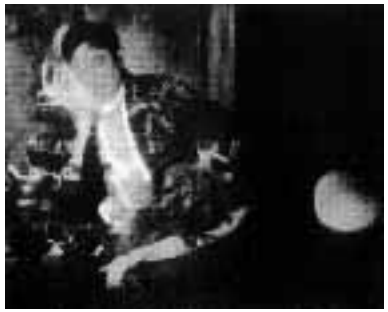

THE CHEAT (Jesse L. Lasky Feature Play Co., 1915)
チート
監督：セシル・B・デミル
出演：イーディス・ハーディ：ファニー・ウォード
ヒシュル・トリ／ハラ・アラカウ：早川雪洲
リチャード・ハーディ：ジャック・ディーン

■解説

1915 年 12 月に公開されたセシル・B・デミル監督作品『チート』は、アメリカのみならず、むしろそれ以上にフランスで大ヒットしたメロドラマだが、当時日本では公開されることがなかった（後年の自主上映等は除く）。その理由ははっきりしている。早川雪洲演じる社交界に出入りする金持ちの日本人ヒシュル・トリがあまりにも残虐に描かれており、国辱映画と日本でみなされたためだ。その神秘性と残虐性があいまってアメリカの白人女性を熱狂させたといわれるこの作品だが、在米の日本人や日系人からは多くの反発があり、雪洲はロサンゼルスの邦字新聞に一種の謝罪広告まで出したという（野上, 69）。

いうまでもないが、『チート』には当時の社会情勢や（国際）政治情勢が色濃く反映している。在米の日本人や日系人による反発の背景には、1913 年に議会を通過した日系人の土地所有禁止法案に代表される反日・排日的な法案の施行やそれを支える（白人）市民感情があった（野上, 68-72; Higashi, 124-5）。1918 年 11 月の字幕 （インター・タイトル）を差し換えての再公開にも様々な社会情勢や（国際的な）政治情勢が影を落としている。

1915 年の公開時、早川雪洲の役柄は日本人という設定だったが、1918 年の再公開時には、「ビルマの象牙王ハラ・アラカウ」に変更された。この改変には複雑な事情が絡んでいるにちがいないが、第一次大戦中の 1917 年、アメリカが連合国側に加わり日米が同盟関係になったため、という説が有力なようである（Higashi, 127; 村上, 19）。

『チート』における早川雪洲の演じる人物設定の変更は、その物語にはさして影響をおよぼしていない（他の出演作でも彼は日本人に限らず様々なアジア人を演じていた）。重要なのは人物設定よりも物語のプロットである。善人か悪人かの違いはあっても、早川雪洲が演じる日本人／アジア人と白人女性の恋愛が成就することは決してなかった。『チート』公開のおよそ 20 年後に施行されるヘイズ・コード（映画製作会社による自主検閲機構が制定した映画製作倫理規定）でいわば正式に禁じられる以前から、異人種間結婚（miscegenation）は事実上禁じられていたのだといってよい。そして禁じられているがゆえに、そうした決して成就しない恋愛物語への欲望は強化され、反復された。スティーヴン・ゴンは次のようにいっている。

> ［雪洲の演じる役は］相手が青木鶴子のときは別として、最後に決まってヒロインをあきらめるような設定だった。こういったかずかずの役柄から、何事にも秀でた東洋人が白人のヒロインと恋に落ち、結末で彼女のために自らを犠牲にする、というハリウッドの新しいステレオタイプができあがった。アメリカ女性たちはこういった物語を通じて違う人種の男性との恋愛という禁断の木の実の味を味わったのである。（ゴン, 15. ［ ］内は引用者による補足）

このゴンのいう「ハリウッドの新しいステレオタイプ」は、雪洲が主演したフランス映画で、より洗練されたかたちで反復される。

1924 年製作のロジェ・リオン監督作品『犠牲』（*J'ai tue*）において彼が演じる日本人は、物語の最後で自己犠牲によって愛する女性 (邸宅に住み込ませてもらい生活の援助を受けている東洋美術研究家の妻) の窮地を救うと、一人静かに彼女のもとを去る。1993 年にシネマテーク・フランセーズで、修復されたばかりのこの作品を見た蓮實重彦はこういっている。

> 三十五歳の主演作『犠牲』の早川雪洲はまさに男盛りのスターとして揺るぎなく輝いている。ハリウッドで多くの女性ファンを惹きつけていた時代のやや誇張された東洋趣味はここにはない。パリの社交界の華麗な男女に囲まれ、寡黙な日本人をごく自然に演じているその落ち着き払った振る舞いに接して、この神話的な大スターの魅力に初めて触れた思いがしたのである。

もちろん自己犠牲的で「寡黙な日本人」というのもひとつのステレオタイプには違いないが、この作品での彼は、体格こそフランス人男優に劣るものの、その存在感では確かに彼らを圧倒している（この修復されたフィルムは 1997 年に「日仏映画交流 100 年」特集上映の中の 1 本として東京日仏学院な

どで上映された）。[1]

公開当時（白人）女性観客を魅了した『チート』にジェンダーの問題系を導入したスミコ・ヒガシは、ファニー・ウォード演じるハーディの人物設定が当時の「新しい女性」像を反映しているという指摘をしている。さらに、彼女はこう議論する。当時の現実の社会はまだ白人男性が支配しており、その覇権の下ではウォード演じる（白人の）「新しい女性」も、早川雪洲演じる日本人（黄色人）男性も弱い立場に置かれており、そうした点において共通項のある二人が、この作品では映像的には同じように撮られている（華美な服装、日本間での陰影の強調、畳の上に倒れたときの二人の姿態）、と。彼女の議論は、人種、ジェンダー、階級といった問題を扱う政治的なアプローチと、映画の表現スタイルを問題にする美学的アプローチを接合させており、多文化主義的な映画（作品）研究としても興味深い。

『チート』は、芸術的・技術的には、公開当初から高く評価された。なかでも、プロデューサーのジェシー・L・ラスキーが『チート』の宣伝文句（“The picture should make a new era in lighting as applied to screen production.” Bordwell, et al., 225）として利用もしたその照明の芸術的効果は、ハリウッドばかりでなく、パリでも注目され、映画関係者に多くの影響を与えた。映画史家ジョルジュ・サドゥールは、その大著『世界映画全史』のなかで、パリで「あらゆる人々から、これまで知られていない新しい芸術の傑作として讃えられた」（56）『チート』の照明に関して、「デミルは、非常に入念な方法で人工照明による表現力の可能性を利用した。卓越した撮影技師に助けられて彼は＜芸術写真＞の手段を利用した。すなわち、明暗効果、射影、逆光によるシルエット、レンブラント式の照明、黒い背景を前にした煙の効果、下から顔にあてる照明などである」（86）と記している。[2]

『チート』が公開された 1915 年は、映画史的には、照明技術が大きく変革した年として記録されている (Bordwell, et al., 224)。そして、その大変革は、『チート』を含む 1915 年にラスキー社で製作されたデミルの作品に帰される。そのため、17 世紀のオランダの画家で卓越した明暗の表現で知られるレンブラントの名が引き合いに出されることの多い照明効果、つまり、一方向から強い照明を当てることで影を強調する全体として暗い調子の画面を作り出す照明効果は、より一般的にはその製作会社の名前をとって「ラスキー照明」と称され、他の製作会社の作品にも多く用いられた (Ibid., 224-5; Koszarski, 228)。

こうした照明による表現力の深化を、デミルや彼と共に働いた撮影監督のアルヴィン・ワイコフ、芸術監督のウィルフレッド・バックランドら個々人の才能だけに帰することはできない。それよりむしろ、効果的なスポットライトとして利用できるだけの強い光源となるアーク・ライトの改良、つまりテクノロジーの進歩に負うところがより大きいはずである（Bordwell, et al., 274-5）。

■註

1) 興味深いことに、この『犠牲』や、初期の代表作『タイフーン』（トマス・H・インス監督作品, 1914）にも、『チート』と同様、クライマックスに法廷シーンがある。

2) 『チート』がパリ／フランスの映画界に与えた衝撃の大きさについては、サドゥールの 125-30 頁が詳しい。また、『チート』は照明だけでなく、編集（カッティング）や画面構成（フレーミング）においても高く評価されている。とりわけその「心理学的編集」は、アベル・ガンスらにも影響を与えたとされる（Nowell-Smith, 34; Higashi, 123）。

■参考文献

Bordwell, David, Janet Staiger, and Cristin Thompson. *The Classical Hollywood Cinema: Film Style and Mode of Production.* (Columbia University Press, 1985)

DeBartolo, John. Review on *The Cheat.* <http://www.mdle.com/ ClassicFilms/FeaturedVideo/video116.htm>

蓮實重彦．「男盛りで輝く雪洲 修復された主演映画『犠牲』を見て」．朝日新聞．（1993 年 1 月 13 日夕刊文化面）．

ゴン，スティーヴン．「早川雪洲――無声映画・武士道・禅」．『知られざるアメリカ映画』．（東京国立近代美術館フィルムセンター, 1993）．

Higashi, Sumiko. “Ethnicity, Class, and Gender in Film: DeMille’s *The Cheat.*” *UnSpeakable Images: Ethnicity and the American Cinema.* Edited by Lester D. Friedman. (University of Illinois Press, 1991).

Koszarski, Richard. *An Evening’s Entertainment: The Age of the Silent Feature Picture 1915-1928.* [*History of the American Cinema.* Vol. 3] (Charles Scribner’s Sons, 1990).

『キネマ旬報増刊 日本映画俳優全集・男優編』．（キネマ旬報社, 1979）．

村上由見子．『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』．（朝日新聞社, 1993）．

野上英之．『聖林の王 早川雪洲』．（社会思想社, 1986）．

Nowell-Smith, Geoffrey [ed.]. *The Oxford History of World Cinema.* (Oxford University Press, 1996).

サドゥール，ジョルジュ．『世界映画全史 7 無声映画芸術の開花――アメリカ映画の世界制覇 [1] 1914-1920』．（国書刊行会, 1997）．

立教大学アメリカ研究所　飯岡詩朗

Copyright © Iioka Shiro 1998

立教大学アメリカ研究所
phone: 03-3985-2633
fax: 03-3985-2632/3
e-mail: ramins@rikkyo.ac.jp
website: http://www.rikkyo.ac.jp/~ias/